

復活 — 魂の春

Resurrection — the springtime of Soul

Takashi Oka/岡 孝

春が来た、春が来た、どこに来た
山に来た、里に来た、野にも来た

私は春が大好きです。ソロモンが歌っているように、「見よ、冬は過ぎ、雨もやんで、すでに去り、もろもろの花は地にあらわれ、鳥のさえずる時がきた。山ばとの声がわれわれの地に聞こえる」(ソロモンの雅歌 2: 11, 12)。春は、私にとって、新しい誕生の季節、生命の再生のとき、復活の季節を象徴しています。しかし、復活について考えるとき、私は、誕生、死、物質的な身体の再建などについて考えているではありません。キリスト教の考えでは、復活は洗礼と密接につながっています、なぜなら、洗礼と復活は共に、パウロが言う「新しき人」(エペソ 4: 24)になることを、含んでいるからです。日々、古き人を脱ぎ捨て、新しき人を着ることが可能なのです、霊的に成長し、神から与えられている特質をもっと現すことによって、それは可能なのです。これが、私の理解する復活です、つまり、考えを再生させ、心の奥深くにおいて変わることです。

第2次世界大戦中、日本のすべての大学には、軍人が配属されていて、これら軍人は、学長以上の権力をもっているようでした。私の大学に配属されていた大佐は、若者の命を桜に例えるのが好きで、満開のときに散る覚悟、「日々死ぬ」覚悟をしていれば、人生を美しく生きることができると、よく諭しました。戦時中の雰囲気なかで聞き慣れた言葉でしたが、私は、成人して、社会人になり、キリスト教科学を真剣に学ぶようになって、一日一日を死ぬ覚悟で生きることの真の意味が分かってきました。「日々死ぬ」ということの霊的な意味は、何が死に、何が生きるかを識別し、理解することです。本当に死ぬのは、パウロのことばを借りれば、「古き人」であって、それは、人生の途上、方向を間違えたり、罪や間違いを犯したりして、取り返しがつかなくなってしまうと諦めてしまうことです。

しかし、同様に確実に、新しい人が日々生まれるのです、そして、これが復活の意味するところなのです(エ

ペソ 4: 22~24参照)。

『科学と健康』の著者、また、キリスト教科学という世界に広がる宗派の発見者、また創始者であるメリー・ベーカー・エディは、復活を、「考えの霊化」、また、「物質的信念が、霊的理解に屈服してゆくこと」(p. 593)と定義しています。

私は、自分の人生を、初めからやり直すことができた、と思ったことが何度かありました。もし、自分が嫌だと思った人生の部分を拭い去って、新しい個性をまとい、文字通り新しい人になることができたとしたら、ことはどんなにか簡単でしょう。しかし、年を経るとともに、もう遅すぎる、以前だったらできたことが今になっては不可能だ、自分は年を取りすぎている、そんな体力はない、間違いをしすぎてしまった、つまり、自分はどう救いようがない、あがないようがない、という誘惑を信じるように、駆られていったのです。

15年ほど前、定年に近づいていた頃、私は自分の落度ではない理由で、5年間に3つの仕事を次々と失いました。雇用されて間もなく、ある会社はその部門をリストラし、また会社そのものが解散した場合もありました。私には、これら失職一つ一つが、ある意味で、ある種の死であるように感じられました。人生には、時間的制限がある、そして失った機会は2度と帰って来ない、という精神的圧力と闘わなければなりませんでした。私は、イエスが、「あなたがたは新しく生れなければならない」(ヨハネ 3: 7)と、ニコデモに教えたことを、修得しなければなりませんでした。

3度目に失職したとき、キリスト教科学の実践士であり教師である親しい友人が、復活こそこの窮地から抜け出す方法だという示唆を、与えてくれました。私の上に重くのしかかっているすべての圧力に、正面から対峙して、それらを厳しく否定しなさいということでした。私は、自分には、救われる、あがなわれる権利があることを、自信をもって理解し、確信しなければなりませんでした、そしてそれは、唯一無限の神、心が、私の創造者であり、私にその権利を与えているゆえ、可能なことでした。「神は奪われることのない権利を人に授けた」と、メリー・ベーカー・エディは述べ、「そのなか

には、自治・理性・良心などがある」(『科学と健康』、p. 106) とつづけています。これらの権利を行使するか、しないかは、私次第でした。

状況が、即座に解決したわけではありません。しかし、祈りつづけ、自分に与えられている復活とあがないの権利を知ることができるようになり、そして、この権利を堅持しているうちに、これまで考えたこともない道に進むように、**神**に導かれました。それは、私の年齢(当時、70代の後半)の者たちが、普通は下すとは思われない決断でした。妻と私は英国に移り、私は、政治学の博士課程に入学したのです。当初、若さと知性あふれる学生たちと机を並べて学ぶことは、少し奇妙に感じられましたが、私は授業の討論に活発に加わり、それを大いに楽しみました。日本の政治の世界で、また国際関係において、自分が経験してきたことを、分かつことができたの

は、皆にとっても意味があったことと思います。そして、それは、私に新しい挑戦をもたらし、同時に新しい喜びをもたらしてくれました。それは、再生することの意味について、まったく新しい展望を与えてくれました。それは、**魂**の春の息吹であり、制限されることも、閉じ込められることもないのです。

それ以来、この展望は広がりつづけています。私は、常に、新しい人になれることを学びました、そして、また、誰でも、縛られたり、制限されたり、棚上げされたりすることのない人生を、経験することができるということを学びました。これを意識することが、復活を経験することなのです。◆

岡孝(Takashi Oka)は、*The Christian Science Monitor*紙の特派員を長年勤めたのち、今、日本の現代政治に関する本を書いている。